

モカとの一歩

二年 梅津 凜

中学一年生になって、私の生活は大きく変わった。

新しい制服、新しいクラス、新しい勉強。でも、すぐには馴染めなかった。私はもともと人前で話すのが得意じゃないし、自分から話しかけることも苦手だった。クラスの中で楽しそうに笑い合う声を聞くたび、自分だけ置いていかれているような気がした。

そんな中で、私にとって一番ほっとできる時間。それは、家に帰って愛犬のモカと過ごすことだった。モカはミニチュア・ダックスフンドという種類で、胴が長くて足が短い、小さな犬だ。私が、小学二年生のときに家に来て、もう四年目になる。モカは小さいけれど、私のことをちゃんと見てくれる。嬉しいときも、さみしいときも、いつもそばにいてくれた。

中学校の生活は、想像以上に大変だった。授業のスピードは速いし、提出物もたくさんある。先週のことだ。数学の授業で提出するはずだったプリントを、私はうっかり家においてきてしまった。先生の前で「忘れてしまいました」と言ったとき、クラスの何人かがクスクスと笑った気がして顔が熱くなった。放課後、誰とも話さずリュックを背負って、一人で家に帰った。

玄関のドアを開けると、モカが勢いよく駆け寄ってきた。私の足に身体をすり寄せて、尻尾をぶんぶん振っている。いつもと同じ光景なのに、その日はなぜか涙が出そうになった。

靴を脱いで部屋に入ろうとすると、モカが玄関から出ようとした。リードもつけていないのに、ちょこんと靴の上に前足を乗せて、私をじっと見ていた。「外に行きたいの?」と聞くと、モカは小さく鳴いた。

久しぶりにモカと二人で散歩に出かけた。向かったのは、家から少し離れた、私が小さい頃よく遊んでいた公園だ。夕暮れの空の下ブランコのそばのベンチに座って、モカを抱きしめた。モカの体は小さいけれど、すごくあたたかかった。

「私、まだまだ全然だめだね」とつぶやいたとき、モカは私の顔を見上げて、べろつと頬を舐めた。その瞬間、胸の中のものやもやが少しだけ軽くなった気がした。

「でもさ、モカがいるし。もうちょっと頑張ってみるね」

そう言った私の声に、モカは尻尾をゆっくりと振った。

あの日のことは、私にとって忘れられない出来事になった。モカは言葉を話さないけれど、私の気持ちを分かってくれている。落ち込んでいた私の背中を、そっと押してくれたのだ。

人との関係は、すぐにうまくいくとは限らない。でも、ひとつずつ、自分のペースでいいから前に進んでいこうと思う。モカと一緒に歩いたあの道のように。